博士学位論文審査要旨

２０１３年7月１５日

論 文 題 目：中国人若年層の社会移動とネットワークの研究
——趣味による紐帯の形成を中心に——

学位申請者：巴　　芳

審 査 委 員：

主　査：　社会学研究科　教授　鵜飼　　孝造

副　査：　社会学研究科　教授　尾嶋　　史章

副　査：　社会学研究科　教授　小林　　久高

要　　旨：

巴芳氏は、改革開放の恩恵を受けた若年世代を中心に、中国の都市高学歴層および海外に進出した留学生や専門職層において、親族や同郷の強い紐帯より、共通の趣味をもつ友人の緩やかなネットワークへと、社会関係の重心が移り変わりつつあるとの仮説を本論文で提起する。

第一章では、経済発展とともに都市に中流階層が出現し、余暇の充実が強く求められ、様々なグループの活動が増殖し、海外で生活する留学生や専門職移民の間でも、趣味グループが活発化している状況を指摘する。

続いて仮説を検証するために、社会ネットワークの理論と方法が検討される。第二章で、都市のコミュニティ解放論から「弱い紐帯の強さ」論への接続をはかり、社会ネットワークを個人的実益と公共性双方に転換する社会関係資本論が展開される。第三章は、中国の社会ネットワーク研究をたどり、家族・企業・地域中心だったものから、中国総合社会調査（CGSS）の実施を契機に、友人ネットワーク研究が、新たな社会関係の変化をとらえつつあることを示す。

第四章以降は実証研究に移り、まずCGSSデータを分析し、1977年に大学入試が復活して以降、学歴社会化が進み、中国社会全体の中でも都市の高学歴若年層が突出した富裕層になり、彼らは家族や親戚さらに職場での関係よりも、友人との付き合いを重視していることが確認された。

第五章では、巴芳氏が瀋陽で実施した趣味グループへの質問紙調査とインタビューのデータが分析される。ここでも参加者の階層的特徴がさらに明確になるとともに、毽球（ジェンキュウ）

のような参加層が広いグループは市民の交流を促進する一方、バドミントンのような会費の高いグループでは、仕事上の人脈づくりや情報交換などの実利的な側面が強いことがわかった。

第六章では、従来の華僑華人に比べて、個人主義的な傾向が強い「東北新移民」が多くなった現在、海外在住の中国人についても友人ネットワークの分析がより有効と論じられる。第七章では、巴芳氏が大阪で調査したサッカークラブでは、市内に分散して住むメンバーが各自の友人を誘うことでクラブが拡大し、やがて同じ専門や職業によるクリークがクラブ内に形成されると同時に、各クリークのリーダーがブリッジとなって、異業種・他分野との情報交換がおこなわれていた。インタビューでは、同胞意識よりも相互援助や情報交換のための友人ネットワークが重視されていた。

最後の第八章で、趣味ネットワークの増殖が、中国本土と海外の中国人社会に共通する現象であることを示し、少子化と個人主義化、中流化とグローバル化が同時進行する中で、社会の信頼関係（社会関係資本）の成立可能性を分析するために、本研究のさらなる展開を期している。

本研究は、社会ネットワークの（中国も含めた）先行研究をよく理解した上で、独自の展開を試みており、実証面でも、既存データで対象全体の特徴を把握した上で、瀋陽と大阪で量的質的両面から独自の調査を実施し、その分析も手堅くおこなわれている。関連の研究成果は各学会で報告され、学会誌にも掲載され、広く評価を受けている。

以上によって、本論文は、博士（社会学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１３年7月１５日

論 文 題 目：中国人若年層の社会移動とネットワークの研究
——趣味による紐帯の形成を中心に——

学位申請者: 巴　　芳

審 査 委 員：

主　査：　社会学研究科　教授　鵜飼　　孝造

副　査：　社会学研究科　教授　尾嶋　　史章

副　査：　社会学研究科　教授　小林　　久高

要　　旨：

2013 年 7 月 15 日、午後 1 時から 90 分にわたり、渓水館 1 階会議室にて、本論文の公開学術講演会を開催した。巴芳氏による報告の後、審査委員および出席者より活発な質疑応答がおこなわれ、巴氏はすべての質問を的確に理解した上で解答することができた。

その後、同日午後 2 時 30 分から 60 分間、口頭試問を実施し、審査委員からは、提出論文の内容および関連理論の理解やデータの分析方法についてさらに質疑がおこなわれた。それに対し、巴芳氏は十分な応答をし、専門分野に関する十分な学力を有することが確認された。また、語学試験（英語）も引き続きおこなわれ、関連文献の読解を中心に審査委員から質問がなされたが、それにも巴氏は問題なく答えることができた。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 中国人若年層の社会移動とネットワークの研究
—趣味による紐帯の形成を中心に—

氏　　名： 巴 芳

要　　旨：

最近の中国人社会においては，経済発展につれ，中流階層が拡大している．中流階層の中心にいる若年・富裕層の人々が，余暇生活の質に対する欲求を高め，強い自己実現と自由志向をもって，余暇生活空間を計画・案出し，スポーツ・芸術・文化的な趣味活動を行い，それが彼らの日常生活の重要な内容となっている．さらに，趣味活動の場において，新たな友人ネットワークが形成されつつあり，その階層移動における重要性も増している．

本研究では，現在の中国本土社会および在日中国人社会においても，趣味活動から形成される社会ネットワークが彼らの仲間意識を強化し，新たな友人関係を形成していることを示す．また，特に友人ネットワークの一形態として趣味ネットワークに注目する．そして，彼らが，趣味ネットワークを介して，多様な社会生活情報と，新たな社会関係資本を獲得し，いかに階層上の地位を保持・展開し，豊かな生活を暮らしているかを検討していく．

第一章では，中国社会における若者を中心とする中流階層の拡大と社会ネットワークの変化について，本研究の背景を述べておく．

中国における経済政策により，“小康水平”に達する中流階層が増加し，都市化が進むと同時に，経済的格差をともなう流動性が高い社会になりつつある．具体的には，社会現象として，あらゆる手段に訴えた私的営業活動の隆盛，その結果としての無定形の「豊かさ」の顕現，都市化が進むと同時に，高学歴で若い富裕層の人々が中流階層の中心を形成し，彼らが友人のあいだで暮らしている．一方，在日中国人社会の場合，中国本土社会の経済発展の影響を受け，来日している中国人たちが，従来の華僑・華人中心の社会から多様な変化を引き起こし，さらに日本の各都市に分散し，長期滞在の在住者が増えてきた状況を示す．

第二章では，欧米社会学からの理論と方法論を導入しながら，中国においても社会ネットワークの理論および方法論が発達し洗練されてきたことを検討し，そして現在，新しい理論展開を導く重要概念として大きな注目を集めるにいたった議論の展開をレビューする．

中国における社会学の「本土化」には長い歴史的な基盤があり，20 世紀前半より，西欧の社会学理論およびイギリスやアメリカにおいて発達した調査方法を用いて，当時の中国社会の様子を描きだしてきたが，ここでは特に，欧米における社会ネットワークと社会関係資本の理論について，検討しながらまとめていく．そして，本研究が主要な研究対象とする「趣味ネットワーク」は，家族や地域社会におけるプライベートな親密性が，公共的な社交性に置き換えられて生じる上で重要な役割を果たしてきたことを論じる．

第三章では，中国社会学における社会ネットワーク研究の展開について，様々な視点から整理検討する．今までの中国の社会ネットワーク研究を振り返ってみて分かることは，かつては集団的なものととらえられていたネットワークが，個人的なものとしてとらえられるようになってきた流れが存在していることである．伝統的な社会関係に注目してきた中国の社会ネットワーク研究であるが，改革開放以降の社会変動をふまえ，現在では新たな段階に入りつつある．特に，若者を中心とする中流階層において，文化的ネットワークや友人ネットワークから生まれている新たな関係は，彼らの生活に

アプローチする際に重要な論点のひとつとされている．そこで，中国の社会ネットワーク研究の大きな方向性をおさえつつその知見をまとめ，さらに今後の研究のいくつかの指針を見出すことがねらいである．

第四章では，中国人民大学によるCGSS（中国総合社会調査）の調査データの再分析を通して，中流階層に多く属するにいたった中国の若者たちが高学歴であり，個人的な友人関係を重要視し，その友人ネットワークが様々な形で広がっていくことを検証していく．CGSS(2003;2005;2006)のデータを用いて，「年齢」「最終学歴」「階層帰属意識」などを主要な変数として，教育状況・階層分布・収入・居住形態・余暇生活などについて分析する．そして，職場ネットワーク・日常生活ネットワーク・相談ネットワーク・拝年ネットワークなどにおいて，友人関係の重要性に注目する．その結果，中国の経済発展につれ，多くの人の余暇生活が豊かになり，かつての集団的な結合が個人的なものとしてとらえられるようになり，特に中流階層に属している若年層の間に，友人ネットワークの広がりという大きな流れのあることが明らかになった．彼らは，伝統的な親族や職場の付き合いより，個人レベルでの緩やかな友人関係を求め，重要視している．そして，相談・拝年ネットワークの分析結果から，家族とならんで友人が重要な関係として挙げられ，しかも友人の割合が増加傾向にあることが明らかになった．さらに新たな可能性をもつものとして趣味を通じた関係が増えつつあることを示す．

第五章では，筆者がおこなった瀋陽での事例調査から，趣味ネットワークの分析を進める．市民生活も豊かになり，人々が余暇時間を重視するようになる中で，仕事あるいは学習以外の，趣味のためのクラブやサークルに参加する人が急速に増えてきた．瀋陽のような現代の中国都市部では，余暇生活の中に，趣味ということが主な時間として使われ，市民が自発的につくるクラブ・サークルなどがたくさん生まれている．2010年6月から筆者は瀋陽市における4つの趣味ネットワークでフィールドワークをおこなった．350人を対象者としてアンケート調査を実施（回収率94%，329人が回答）分析し，参与観察および個人・グループインタビューの結果も合わせて，趣味ネットワークの社会関係資本としての特質を明らかにする．

第六章では，日本における華僑・華人研究は，近年，専門書や啓蒙書の刊行も増え，若い研究者も年々増加しているので，それらの調査や研究を紹介した上で，在日中国人社会研究における変化を検討する．

そこで注目するのは，華僑・華人研究においても，在日社会を集団的なものから個人的なものとしてとらえるようになってきたということである．時代が進むにつれてその同胞集団・団体としての機能は縮小し，現在では個人的なネットワークを生み出す基盤としての機能をもつにいたっている．さらに，社会ネットワーク研究の影響を受け，社会関係資本に対しても，集団でなく個人の視点からとらえる研究も出てきている．また，集団ベースの硬いものではなく，緩やかな個人ベースの社会関係資本のほうが個々人に与える影響は大きくなりつつある．現在のところ，このような趣味ネットワークに関する研究はまだ少数であるが，萌芽的研究は現れつつある．

第七章では，大阪におけるサッカークラブの事例を取り上げる．まずクラブの全体像を把握するためにアンケート調査を実施し，次にネットワーク分析の方法を用いてクラブがどのように形成され，その中の人間関係が変わっていったかを解明する．そして，在日中国人若者たちのエスニック・アイデンティティの変化について，インタビュー調査データを検討していく．事例分析から，在日中国人の若者たちは，職場・学校などで円滑な友人関係を保とうとするが，同時に，他とつながることで個人の様々な能力を発揮する場が提供され，誰でも主役になれる世界を実現したいとも考えている．友人ネットワークは，楽観的にいえば，多様で豊かな在日中国人社会である．個人的な生活の楽しさを享受する一方でプライバシーを重視し，伝統的な付き合いから解放されるので，そこでの緩やかな友人との信頼関係が在日中国人の若者たちにとって大切な関係になっている．

第八章では，本研究の分析結果をまとめる．中国本土における事例研究や，在日中国人のサッカークラブの調査から，趣味ネットワークを作り出し参加するのは，まず趣味のためではあるが，その上，生活・仕事・勉強などにプラスとなるネットワークを広げて作りだすための目的も存在することが明

らかにされた．以前の中国人社会ネットワークの強い結ばれ方と比べると，現在新しく形成されている若者ネットワークの連結は弱く見えるが，その幅は広がっている．他方，趣味活動に参加しつつ，弱い紐帯から強い紐帯になっていく側面もみられる．しかし，全体的にはその幅の広がりとともに入手する情報もますます多様になり，社会関係資本の形成も緩やかな形になっている．それを，中国本土社会と比較すると，在日中国人社会のほうが，趣味ネットワークの重要性が明らかに高いと思われる．趣味ネットワークを社会移動の機会とし，ビジネス構造と活動を大きく変えるとともに日常生活にも多大な影響も与えてきた．つまり，欲しい情報を得るために個人ベースの友人ネットワークを作ることによって，コミュニケーションできる環境を実現するネットワーク内のコネクティビティを高めている．しかし，中国人本土社会においても，友人ネットワークは都市の生活を充実させるものが数多く出現し，信頼に与える構造的効果が生まれている．

最後に，近年の若者たちの新しい動きや変化は，旧来の研究にいかなる問題を提起し，現在，最先端の研究はいかなる方向に展開しつつあるか，多様でネットワーク的な中国人社会を対象とする研究の相対化という課題に向けて，中国と日本という地域を如何に位置づけるかを考え，そこから中国人研究や海外（日本）における中国人研究を問いたい．